

# 助成年度：平成7年度

[所属] 茨城大学 農学部

[役職] 助教授

[氏名] 柏 雅之 (他計6名)

[課題]

## 中山間地における地域資源維持管理手法の開発に関する研究

－第3セクターを軸とした地域重層的な資源管理システムの形成をめぐる－

[内容]

本研究では、中山間地域における土地利用型農業再編および地域資源管理システム再建方式に関する実証的研究を行った。国による本格的なデカップリング政策が立ち後れているなかで、現場の中山間自治体では1980年代末から自然発生的に第三セクター（市町村農業公社）による農地管理事業がなされてきた。こうした方式によって緊急避難的に「農地管理危機」は回避できる。しかし今後の展望をどう描くのかについて問題は先送りされたままである。また当該事業の理念についても曖昧なままである。さらに第三セクター方式の適用に関する地域的限界に関する解明もなされていない。

本研究では、まず担い手の空洞化が進行した「後退型中山間地域」と、緩やかな過疎化のなかで規模拡大型農家層が形成されてきた「拡大型中山間地域」とに地帯区分し、各地帯の水田農業構造を解明した。つぎに各々の農業構造に対応した、土地利用型農業と地域資源管理の担い手再建問題に関する解明を進めた。

過疎化・高齢化によって担い手が空洞化している北陸や中国などの「後退型中山間地域」では、担い手に代替する「担い手代行型第三セクター」を中心とした資源管理システム再建問題を中心課題とした。とりわけ、新潟県でみられるインキュベート志向型第三セクター育成事業の意義と限界を、市町村農業公社の実態分析をとおして解明した。ここではインキュベート事業の公共性と、インキュベート・コストに関する評価問題に焦点をあてた。

また中国地域では分析では、従来からの集落営農方式および個別型経営による農地管理システムの意義と限界について考察を深め、インキュベート志向型第三セクターの意義を浮き彫りにした。こうした分析を中心に、後退型中山間地域における資源管理システム再建の展望として、第三セクターによる「インキュベート・アンド・地域還元」方式を提起した。当該事業に対する公的コスト負担の根拠となる公共性評価手法に関しても考察を進めた。

つぎに担い手が存続し、過疎化のなかで規模拡大型農家層が成立している九州、東北の「拡大型中山間地域」の調査においては、そこでの農業構造に関する分析を中心とした。

「集約再編型」農家層の形成がみられる中部九州水田型中山間地域においては、担い手農家層の地域資源管理における評価問題や経営構造に関する分析を中心に行った。こうしたなかで当該農家層を支援する「担い手支援型第三セクター」の問題について論及した。

同様の「拡大型中山間地域」として東北水田型中山間地域の事例を分析した。事例の山形県最上地域では、緩やかな過疎化のなかで「拡大型」農家層が形成されている。また依然として分厚く中間規模階層が存続する点も中国などの後退型中山間地域と異なる特徴である。地域資源管理はこうした中間層と「拡大型」農家層によって担われており、後退型中山間地域のような担い手代行型第三セクターによる農地管理の必要性は現状においては乏しい。しかし「拡大型」農家層の経営構造は稲作プラス不安定兼業といった「旧来型」の構造を脱し切れておらず、農業経営の専門的自立へ向けたテイクオフに至っていない。こうしたなかでウルグアイ・ラウンド農業合意のもとでコメの価格支持が後退するなか、非銘柄のコメ依存体質の濃厚なこうした農家層がどのような将来展望を描けるかに関しては不透明である。しかし現状において中間層とも併せて

こうした個別農家群が地域資源管理の担い手として存続していることは事実であり、担い手の空洞化が進行した後退型中山間地域とは異なる地域資源管理支援方策が必要であることを提起した。

以上、後退型、拡大型といった2つの地帯類型別に、地域資源管理の担い手再建方策の提起を行った。